

ジェンダーフォーラム読書会活動報告



ジェンダーフォーラム所員、本学文学部助教 石川 千暁
ジェンダーフォーラム教育研究嘱託 土野 瑞穂

ジェンダーフォーラムでは2017年度からの新しい試みとして読書会をスタートさせた。前期・後期ともアメリカのフェミニスト文学批評家・活動家であるベル・フックスの著書を取り上げ、本学の学部生、院生、教員、学外の研究者、および一般の参加者とともに、笑いと涙を交えながら生き生きとした議論を行った。

前期は『フェミニズムはみんなのもの―情熱の政治学』（堀田 碧訳、新水社、2003年）を輪読した。同書は、フェミニズムとは何でありどのような運動かについてコンパクトで読みやすく、わかりやすく書かれた一冊である。日本でも昨今、広辞苑における「フェミニズム」「フェミニスト」の定義が問題視されたように、「フェミニズム」とは「男性に反対する運動」や「女性が男性のようになること」と誤って解釈される傾向がある。しかしこの定義からは、女性も性差別的でありうること、男性も意識次第ではフェミニストになりうることなどが抜け落ちてしまう。そこでフックスは「フェミニズムとは、性にもとづく差別や搾取や抑圧をなくす運動のこと」であると、誰もが理解できるような定義を提示した。フックスのフェミニズムの定義を手がかりに、本読書会では、女性たちの中の階級問題、人種と性差別の交差、暴力、労働、結婚、からだ、セクシュアリティ等について、自分たち自身の経験を語り合いながら、理解を深めていった。フックスは家父長主義的な社会を変えるためには、コンシャスネス・レイジングを通じて私たち自身が目覚めなければならないと述べている。前期の読書会は、家父長制が私たちの生活の隅々に張り巡らされている現状について、年齢や職業、性的指向も異なる者同士ができる限り対等に対話を重ねた、コンシャスネス・レイジングそのものであった。

後期に取り上げたのは『とびこえよ、その囲いを―自由の実践としてのフェミニズム教育』（里見 実監訳、新水社、2006年）である。同書が伝えるメッセージは、一言で言えば、「いかに『わくわく』した授業を生み出すか」という極めてシンプルなものである。しかし「わくわく」を生み出すためには、参加者が自由に発言できる場、すなわち教室内で一人ひとりの人間がお互いの存在を認め合うことが可能な場としての「学びの共同体」を作る必要がある。本読書会ではそ

のような場の創造の大切さを難しさと、教員と学生それぞれの立場から確認した。フックスが指摘する、授業が始まる前からすでに教室内に存在している階級や人種の問題、教員の持つ権威や身体性の隠蔽などの論点をめぐって、自分たち自身の経験を振り返りつつ、どのように困難を乗り越えていけるかについて話し合った。そしてフックスの言うように、「わくわく」とは、学びが単なる知識の吸収では終わらず、(しばしばアカデミズムでは軽視されがちな)個人の経験が学問的知と結びついた瞬間に得られる興奮であることを共有した。この興奮が生み出されるのは、学生が自由に語れる場があればこそである。ただしフックスは学生の声を解放するだけでなく、教員が自らの声で自由に語ることが必要になってくるとも述べている。教室という空間において、学生がエンパワーされるだけでなく、教員もまた学生と共に学ぶことを通して癒されたり、勇気付けられたりする。これが、教員が一方向的に学生に知識を伝達する既存の教育スタイルと、フックスの提唱する「自由の実践としての教育」の決定的な違いである。

本読書会は、先にも述べた通り、フェミニズム運動やフェミニズム教育学が大切にしてきた、個人的経験を語り合うことを通したコンシャスネス・レイジングの試みであったと言える。さらには、皆が自由に語ることで、学生のみならず教員として普段学生に接している参加者にもしばしば感動がもたらされ、まさに「自由の実践としての教育」の可能性を体感させられるような場ともなっていた。

このような教育の機会が日本では数少ないことを考えると、今回の読書会開催はすべての参加者にとって貴重な経験だったのではないかと思う。学内外を問わずどなたでも参加でき、ジェンダーやセクシュアリティについて本音を交わせる場という、ジェンダーフォーラムの特色を生かした運動と教育の実践である。これからも読書会を継続的に開催し、多くの人々と知的興奮と喜びを共有することで、性差別・性的抑圧による痛みを癒し、家父長制に抵抗し、社会を変革していくための共同体を育んでいきたい。